Toyota City Museum
Of
Local History

豊田市郷土資料館だより

No.96

四季風俗図（四民図）屏風／左隻
伝・二代 英 一蝶筆

花籠図屏風 生川鷗心筆

東海道図屏風／右隻

目次

書状貼交屏風 2・3
藤岡・小原地区における
近代の磁器生産について 4・5
民具調査だより 22 荷物を運ぶ
荷なう・担ぐ・背負う 6
三水湖と観光の歴史 7
歴史的町並みを守る 防災の取り組み 8
豊田の城 ここが面白い！ 9
「とよた歴史マイスター」大募集 10
新収蔵資料紹介 5 味噌樽 ～みそだる～ 11
「第３回とよた歴史検定」受検者募集中 12

ISSN 0919-0120
201610 No.96

書状貼交屏風（しょじょうはりまぜびょうぶ）

平成28年度豊田市郷土資料館特別展「旧家の蔵から～足助の町を彩った商人文化～」では、足助の商家に伝わった屏風や掛軸、漆器などを展示するとともに、足助商人たちがたしなんだ茶道・香道・俳諧などの文化を紹介しています。足助は、名古屋や岡崎から信州へ抜ける伊那街道（飯田街道）の中継拠点で、多くの物資や人々が行き来したため商業が発達し、江戸時代から多くの商家が軒を連ねました。そして、この足助の町並みは、平成23年に重要伝統的建造物群保存地区に選定されています。

今回の展示では、足助の商家から寄贈いただいた民具や古文書を調査した結果、新たにわかってきた商人たちの文化を紹介しています。

ここでは、展示資料（前期）の内、「書状貼交屏風」を紹介します。江戸時代や明治時代、著名人から送られてきた書状を屏風に貼り込むということがよく行われました。この屏風は、豪商・紙屋鈴木家に伝わったもので、香積寺の風外と俊龍、裏千家・玄々斎宗室や岡崎の俳人・鶴田卓池などの書状が貼られています。紙屋鈴木家は小出家とともに、領主・本多家の御用商人となり「士分格」を与えられた豪商で、豊田市に寄附された旧鈴木家住宅は重要文化財に指定され、現在、修理が進められています。

俊龍書状

この屏風に貼り込まれた書状を見てみましょう。天保12年（1841）に香積寺住職となった寂潭俊龍（1801～1869）から鈴木金八（10代鈴木利兵衛）に出された書状（左上）では、大老井伊直弼が暗殺された桜田門外の変のことにも触れられています。俊龍は、画僧としても有名な風外本高の跡を継いで香積寺の住職となった人物です。近江国彦根城下の清涼寺で井伊直弼と出会ったことが縁で、香積寺を退いた後に、井伊家の菩提寺である武蔵国豪徳寺の住職に迎えられました。安政３年（1856）に桜田門外の変で井伊直弼が亡くなった時には導師を務めています。

書状を見ると、桜田門外の変が起きたのは３月６日、襲撃した浪士は40人程としていますが、実際は３月３日、浪士は18人といわれています。また書状では、井伊直弼は少し怪我をしたものの何事もないとしています。大老の死亡が伏せられていたためでしょうか。書状が記されたのは３月７日であり、事変の日付や浪士の人数の齟齬（そご）に情報の混乱が現れています。

紙屋鈴木家の人々は江戸で起きた大事件を、この書状によって知ったのでしょうか。

［翻刻］俊龍書状

二月十五日御認之花墨、三月
五日致落手披見仕候処、
其御地茶般御無事之由、
目出度御事奉存候、
一、去年者元祖穏海之御年
忌御丁寧ニ御勤被成候趣、
致承知候、
一、大鷲院江為穏海沙弥
祠堂御寄附之事、是以結好(誼)
御志致承知候、
一、去年以来御家内病人多分
「　」
「　」
申候事、
右段、遂忝承知候、然ル処
当三月六日朝、伊井(ママ)候
御登城、先桜田御門前
ニ而浪(狼)藉者四拾人程群
取乱ニ而騒動致、屋敷ニ而も
両三人即死、五・六人も致怪
我候、乍然殿様へも何事も
無之、少シ之怪我致為遊候、仰
之事ニ而、其節桜田御門前
余利(より)成行ニ而御帰りニ相成、
敵方者四十人皆々召取ニ相成
致入牢罷在、先ニ義士
以来之騒動騒敷事ニ御座候、
此後如何様ニ相成候者欤、相知
不申候、今日者殿様ゟ御召し
付催促出掛罷在候間、新
挙御免可被下候、且亦御親
類中宜敷御伝達御頼申候、
一、香積寺へも書翰可呈候処、
右之仕合ニ而混雑仕居り候、
追々書状可差出候間、香積
方丈江も宜敷被仰出可被下候
様御頼申上候、以上、

豪徳寺

三月七日　　俊龍（花押）

鈴木金八様

御報

【補注】

※大鷲院…曹洞宗。加茂郡八桑村。現豊田市新盛町。

風外から鈴木盛山（６代鈴木利兵衛）に宛てた書状もあります。これは、風外が香積寺を去って、大坂の烏鵲楼に赴いた後のもので、内容は時候の挨拶程度ですが、画僧・風外らしく絵が添えられています。

風外書状部分

また、裏千家・玄々斎宗室から、鈴木宗頓（8代鈴木利蔵）に宛てた書状では、「宗味」という人物が西尾・岡崎・寺部などを訪れた際に、宗頓が世話したことに対する礼が述べられています。宗頓は玄々斎から直接茶道の免状を受けています。玄々斎は大給松平家に生まれ裏千家の養子に、実の兄は寺部渡辺家の養子となり10代目を継ぎ、又日庵と号しました。裏千家・寺部・足助と、江戸時代の豊田市域では茶道をたしなむ武士や商人が多くいました。

（山田佳美）

会期：平成28年9月17日（土）～ 11月27日（日）
　　前期～ 10月23日、後期10月25日～
会場：豊田市郷土資料館　第1・2展示室
　　月曜休館（但し、祝日の場合は開館）
入館料：一般300円、高校生・大学生200円
　　中学生以下、70歳以上、豊田市在住・在学の高校生、障がいのある方およびその介護者1名は無料（要証明書等提示）
※前期の半券提示で、後期の観覧料100円引き

藤岡・小原地区における近代の磁器生産について

藤岡・小原地区における近代の磁器生産は、これまであまり注目されたことはありません。特に盛んであった木瀬村(藤岡地区木瀬町)などは、吉田藩領であった近世末期において蛙目(がいろめ)粘土が発見され、瀬戸・東濃地方向けの窯業原料生産地であったため、それが磁器生産開始のきっかけとなったと考えられます。

近代になると、『西加茂郡特有物産表』(愛知県1878)には、白川村(藤岡地区白川町)において、長平瓶(碍子(がいし))との記載があり、明治10年代前半に窯業生産が行われていたことは確実です。窯跡(宮脇窯)では、碍子のほか、湯呑などが採集されています。

一方、李村(小原地区李町)では、広円寺所蔵の「陶器窯結社仮規約書」により、明治12年(1879)に共同経営の形態で開窯したことが分かります。共同出資による原資を基に、下記の規約のもと、尾張国赤津村の職人嘉七が李村に窯を築き操業を始めたものの、明治15 年(1882)には経営存続が断念されました。現地では、手描きによる呉須絵が施された飯茶碗・湯呑が採集され、大皿田窯として遺跡登録しました。

これら近代初期の窯業生産が、地域経済に与えた影響は、どれほどだったのでしょうか?『愛知県工業年報』(愛知県1887)によれば、明治20年(1887)における県内の磁器生産高は、1636万6千7百個(36万２千12円)とあります。一方、ここで取り上げる磁器窯が位置する西加茂郡の状況について、『西加茂郡誌』(田中1892)を精査すると、明治21年(1888)の磁器生産高は、44万8千6百個(3739円)とされています。以上から、県内全体に見る生産高は、極めて微々たるものであったかが分かります。

しかし、地域における諸産物との生産高比較を『西加茂郡特有物産表』(愛知県1878)で試みると、生糸(木瀬村)、紙類(北部20ケ村)、菓子(大坂村)などがあり、その生産高はおよそ３千４百円となります。近代における山間地域の現金獲得手段としては、何より生糸産業が思い浮かびます。しかし、当市内において養蚕が発達するのは、明治20年代からであり、それ以前は、磁器生産も貴重な現金獲得手段の一つであったことが分かります。

明治30年代になると、橋本庫次郎が、木瀬村において窯業技術を学び、上仁木村(小原地区上仁木町)の鈴木又三郎らに呼びかけ、共同経営で操業を開始しました。３年ほどでそれぞれ独立し、鈴木又三郎は、金寿陶磁器製造所として、東濃の水上村・猿爪村より職人を招へいし、焼成室３室の連房式登窯(れんぼうしきのぼりがま)を築きました。橋本庫次郎らによる窯(宇頭坂窯)は、居住地点とは離れた丘陵斜面と谷地形を利用して築窯されています。１号窯は、南向きの丘陵斜面を利用して築窯されており、２号窯は、１号窯から南東へと傾斜した谷内に構築されています。注目されるのは、２号窯は、谷合を吹き抜ける風による火力を期待して、谷内に人工的な傾斜を盛土造成し、積石で土留めを行い、連房式登窯を構築している点です。１号窯に比べ、築窯技術が熟達していることが分かります。

「陶器窯結社仮規約書」

一　陶器窯結社歩合之儀者、社中一同平等タルベキ事。
一　岐阜県恵那郡岩村杉田嘉十、同県土岐郡細野村森幸兵衛ノ二名ノ儀者、織部屋織人部屋弐棟ノ新築費ハ除ク事
一　社中一同の人選ヲ以テ会計係一人ヲ定メ、該件ノ庶務ニ従事セシムル事。
一　資金出金方法ノ儀者、会計係ヨリ報知次第、歩合ノ資本金速ニ出金可致事。
一　会計係月俸之儀者、社中協議之上三円五十銭ト相定メ候事。
一　資本金出方会計係ヨリ報告ノ日限ニ不差出時ハ、社外ノ者ト見做シ可申事。
一　陶器窯半途ニシテ社外タラン事ヲ請フ者ハ、入金ノ半ヲ返スベキ事。
前各条の趣、社中一同協議之上規約取極、為後日之証各社員銘々連署致置候事。
愛知県三河国西加茂郡李村
　明治十二年四月　徳盟社
右社員
同郡　川下村　福井五七十　㊞
李村会計　加藤政六　㊞
李村　加藤彦一郎　㊞
李村　松井源七郎　㊞
市場村　山内喜四郎　㊞
市場村　福井三七十　㊞
市場村　木村明三　㊞
市場村　内田仙教　㊞
大坂村　二村作十　㊞
乙ヶ林村　高見彦四郎　㊞
川見村　土井庫次郎　㊞
岩村　杉田嘉十　㊞
細野村　木村幸兵衛　㊞
百月村　成瀬半衛　㊞

宇頭坂窯に後続する金寿陶磁器製造所(穴田窯)は、居住地点に近接して窯が構築されており、時を経るごとに、職住一体的な生産体制を志向した立地へと移行していることが分かります。

これまでに、藤岡・小原地区では、磁器生産窯20地点を確認しています。窯体構造の観察所見からは、窯の構造は連房式登窯(縦狭間構造)であり、焼成に使う窯道具(匣鉢(さやばち)・ニギリ)の特徴から、近接する瀬戸・東濃地方との関連性が指摘できます。市街化が進むにつれ近代の窯業遺構が改変・滅失していった瀬戸・東濃地方と異なり、極めて良好に遺存している点が特筆されます。

近世以前から窯業生産の系譜が続く瀬戸・東濃地方の諸村では、村を超えて共通する製作難易度の低い生産器種(飯茶碗・湯呑)の他に、珈琲カップ、徳利・急須・ティーポット、鉢・丼類など製作難易度の高い製品については、村ごとに特定の器種に特化した生産を行っていたことが分かっています。

一方、近代以降、磁器生産に参入した藤岡・小原地区では、飯茶碗・湯呑に特化し製造が行われました。特殊な器種を製作するための成(整)形技法や分業体制を習得・確立し得なかった状況下で、迅速に産業を興そうとしたチャレンジ精神が窺われます。

(髙橋健太郎)

藤岡・小原地区内の近代の磁器生産窯

荷物を運ぶ

荷(に)なう　担(かつ)ぐ　背負(せお)う

現代生活の中にあって、私たちは少し重量のある荷物を運ぶ時には一輪車や台車を使ったり、自動車に載せたりして運搬をします。これらにはいずれも“車”という文字がその名につけられています。民具の登録品名の中にも、ネコ車・荷車・大八車・人力車・リヤカーなどという車輪を備えた道具名があり、この“車”は人の力の足りないところの手助けをしてくれます。では車を備えた運搬具が使えなかった時代や状況の場合、人々はどのようにして荷物を運んだのでしょう？

人力による運搬

効率よく安全に荷物を運ぶために、様々な運搬方法と運搬具が工夫されました。また運搬具は荷物の状態に合わせ素材や形態が考えられ、運び易くするための梱包具としての役割も与えられています。

◇頭上で支える運搬―ワラや布で作った輪形の頭当てを用い、主に飲料水を壷や桶などに入れて運ぶ方法。主に女子の運搬具として、伊豆諸島、中国、四国、などで行われていました。他には京都大原の花売り、“大原女”も頭上に載せて運んでいます。

〈頭上運搬〉　図版１

◇肩に担う運搬―袋状のものや俵を直接肩に担いだり、棒に荷物を括り付けるなどして荷物を運びます。棒を用いる場合は、棒の一端に荷物をつけて一人で担う他に、棒の両端に荷物をつけて一人で担う「天秤担(てんびんかつ)ぎ」や、棒の中央に荷物をつけて両端を２人で担う「刺担(さしにな)い」などという方法があります。

〈天秤担ぎ〉　図版２
瀬戸物を売歩く
「棒手振（ぼてぶり）」

〈担ぎ運搬〉　図版３

図版３で従者に担がれているのは挟(はさ)み箱(ばこ)。外出するお嬢さんに従い荷物を運んでいます。挟み箱は、竹竿の先端を二つに割り、間に書状や衣を挟んで担ぎ運んだ“挟み竹”から由来した名称ですが、これを両端につけて「天秤担ぎ」で運ぶ事も多いので、『両掛け』とも称されます。

■挟み箱
柳行李製　W495　H300　D325
天保12年(1841)辛丑の墨書あり

蓋裏の商標
「名古屋本町七丁目
吉野屋又兵衛
御挟箱司」

■挟み箱
竹製　W575　H348　D365

■担い棒部分
W48　L1540

◇背負う運搬―荷物を背負う運搬の方法は現代でもあり、小学生のランドセルやディ・パックなどはその典型です。左の写真は葛籠(つづら)。衣服などを入れる蓋(ふたつ)付きの籠です。収納と共に運搬にも使われました。昔話の“舌切り雀（雀のお宿）”でお爺さんとお婆さんが背負って帰ったアレです。

（東海民具学会　岡本大三郎）

■葛籠
竹製 W488 H695 D365

図版 1、2、3 とも〈四季風俗図（四民図）屏風〉英一蝶・作より

小さな猿投村が 一世風靡した

三水湖と観光の歴史

国道153号の平戸橋で矢作川を渡り、足助方面に１km程向かうと、左に雄大な湖面が広がります【写真１】。ここは昭和４年(1929)の越戸ダム【写真２】の完成により出来たダム湖で、矢作川、力石川、御船川の３つの水が集まることから、地元では三水湖と呼ばれています。現在では、地元の高校や社会人のボート部の練習に利用され、その成績は全国トップクラスを誇ります。昭和初期､ここは県下でも指折りの景勝地で、その後、加茂県立公園という名で一世を風靡しましたが、今ではそれを知る人も少なくなりました。

大正時代の好景気により、人々が観光を楽しむ気運が高まりました。勘八峡は、平地と山間部の境界であり、また、三河鉄道(現名鉄)や飯田街道(塩の道)が通る交通の要所で、名古屋や岡崎から訪れ易いため、観光事業が立ち上りました。その一つが大正10年(1921)に現在の越戸ダムから平戸橋下流で始まった鵜飼で、夏の夜ともなれば、観光客が屋形舟に乗り、鵜匠の手さばきに酔いしれ、平戸橋は見物する人波で埋まりました。休日は人混み整理として警官隊が出動したほどです。そして、大正末期には馬場瀬やな(現在の越戸ダム下流)が始まり、いずれも天然鮎が矢作川で豊富に獲れていた事を物語っています。

この様に平戸橋・勘八峡は観光地として栄え、昭和２年に行われた愛知県下観光名所投票で堂々の第６位となりました【写真３】。現在の豊田市域でもここしかランクインしておらず、その上位には、岡崎公園や伊良湖岬などがあり、いかに小さな猿投村が観光地として知れ渡ったかを物語っています。

やがて時代の流れとともに、電力需要や洪水対策、農業用水確保の気運が高まってきました。古代から、矢作川流域の洪水は定期的に発生し、人々の幸せと希望を一瞬に奪っていました。そこでダム建設のプロジェクトが出てきましたが、ダムを造れば鵜飼と馬場瀬やなは営業できません。夢ある観光を取るのか、現実的な日常生活を取るのか、先人の苦悩する姿が思い浮かびます。

越戸ダム完成後、洪水は激減しました。その後、鵜飼や馬場瀬やなに代わり、越戸ダムとダム湖が、周囲の自然とマッチングするとして観光資源となり、三水湖と命名されました。季節毎に景色が楽しめ、遠くから再び観光客が訪れる様になりました。戦前、戦中の動乱期は観光の気運は下がりましたが、戦後復興の一つとして脚光を浴び、昭和22年ヤハギ川観光協会(のちに何度と名称が変わる)が当地に設立されました。猿投村も支援する形で三水湖に貸しボートの設置、吊り橋の架橋、遊歩道の整備、NHKのど自慢の開催(昭和25年)を経て、昭和26年加茂県立公園として指定されました。小さな猿投村が観光で大きな存在になった時です。

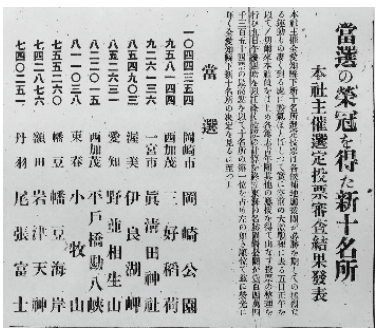
しかし、昭和34年９月26日に東海地方を襲った伊勢湾台風で、ボート・吊り橋が流出し、公園は壊滅しました。合併した猿投町でも支援できず、観光協会は昭和35年解散に至りました。時は流れ、民間による観光事業は消えてしまいましたが、現在では公的な文化施設「平戸橋いこいの広場」､「豊田市民芸館」､「前田公園」があり、市民の交流の場となっています。そして先人が観光事業に流した汗や涙は涸れることなく、三水湖の水となり、若い力を応援しています。

(とよた歴史マイスター　田内三男)

【写真１】

【写真２】

【写真３】新愛知新聞(昭和２年７月10日)



當選の榮冠を得た新十名所

本社主催選定投票審査結果發表

當選

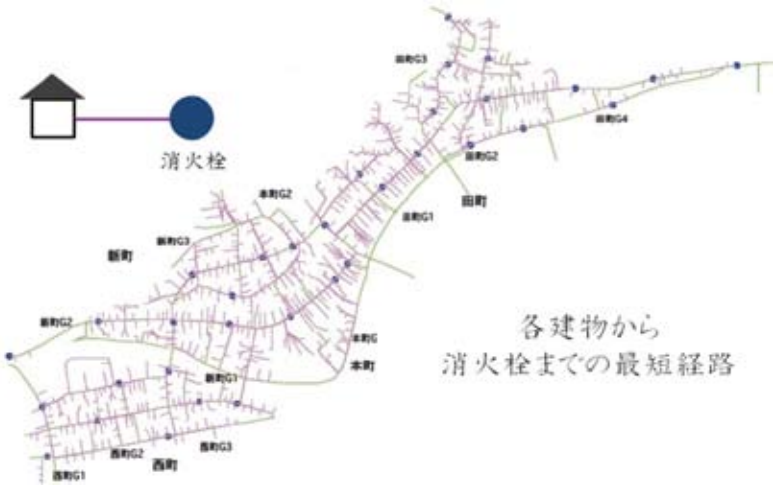
岡崎公園　一〇四三五四
三好稲荷　九五八一四四
西加茂　一二六一三六
一宮市　眞清田神社　八五四九〇三
渥美　伊良湖岬　八五二六三一
愛知　野並相生山　八二一〇一五
西加茂　平戸橋勘八峡　八一一〇三八
東春　小牧山　七五二六〇
豊橋　海岸天神　七四二八七六
瀬川　岩津　七四〇二五一
丹羽　尾張富士

歴史的町並みを守る 防災の取り組み

≪豊田市足助伝統的建造物群保存地区≫

豊田市足助町のほぼ中心部に、歴史的な古い町並みがあります。古くから物資運搬や庶民通行の要所として栄えた商家町です。住民の町並み保存への意識が高く、今も江戸から明治末までに建てられた建物が多く残っています。平成23年６月に愛知県初の重要伝統的建造物群保存地区に選定され、国の文化財として位置づけられました。

伝統的建造物群保存地区という文化財の大きな特徴として、そこが多くの住民の生活の場である点が挙げられます。しかしながら、歴史的な素晴らしい景観である一方で、災害、特に火災の危険性が非常に高いと言えます。木造の建物が密集し、道路の幅も狭いため、延焼の危険性が高いのです。また、消防活動や避難もスムーズにはいきません。



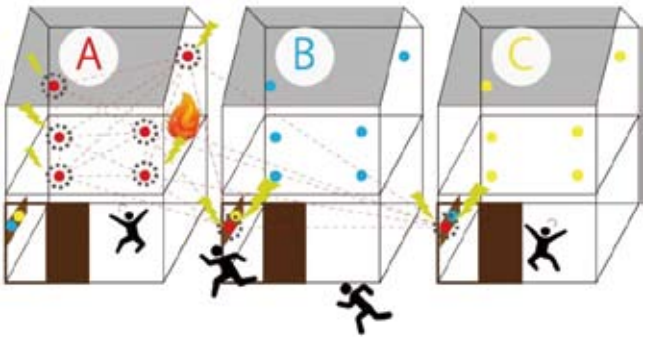
≪防災計画≫

そこで、豊田市足助伝建地区の防災計画を策定し、ハードとソフト両面で、必要な対策を講じていこうと、防災調査を進めています。主なポイントは、住民によりいかに早く出火を見つけ、いかに早く初期消火を行うか。そのうちのいくつかの調査について、簡単に紹介します。

【無線連動型住宅用火災警報器の連動調査】

グループとして登録したいくつもの火災警報器が無線を飛ばし合い、近所に火災を知らせるもので、火災の早期発見が期待されるものです。

木造建物が密集し、空き家も存在する伝建地区では特に有効と考えられるため、実際に地区内で無線が連動するのか現地調査しました。概ね30mを超えない範囲であれば正常に連動するようです。



【消火栓カバーエリアの検証】

既設消火栓の位置を確認し、消火ホースを伸ばしても水が届かない建物を調べました。小路での引き回し等も考慮した調査として、地区内すべての建物から最寄の消火栓までの最短経路とその距離を調べました。これにより、実際的にホースが届きづらい建物がどこなのかが分かりました。

このほかにも火災延焼シミュレーションなど、各種調査や、住民がより使い易い消火設備の検討などをしています。今年度末に防災計画を策定し、順次対策をとっていく予定です。皆にとっての大切な町並みを、行政と住民が協力して守っていけたらと願っています。

（足立公平）

豊田の城ここが面白い！！

～素人Ｋの豊田の城案内～

ここでは、学芸員資格を持たない職員Ｋが豊田の城を素人目線で紹介します。

普段歴史に馴染みのない方にも豊田市の歴史に対して興味を持つきっかけにしていただければと思います。

○大給城（おぎゅうじょう）

豊田市松平地区に位置し、巴川畔から松平郷へ入るルート（現国道 301 号線）を眼下に望むことができる山城です。

この城の大きな特徴は・・・

『物見岩からの眺望』です！

おススメの絶景！！

天気のいい日には、豊田市街を見下ろし、名古屋の JR セントラルタワーズ、東山動植物園の東山スカイタワー、奥には養老山地まで望むことができます。秋には、紅葉も楽しめるそうです！

これほど見通しのいい物見岩で、当時は周囲の木は無かったそうなので、四方から松平への侵入者をいち早く把握し、敵襲に備えることができたと予想されます。

城は、急こう配の山頂にあり、加えて地面を削った堀切や石垣を設け、二重三重の防御ラインを構えています。戦国時代の山城で石垣を使用しているのは、珍しいそうです。さらに、通路となるところに櫓台を配置するなど、鉄壁の防御を誇っていました。また、城内にため池を設置し、兵糧攻めにあった場合の対策もしてあったようです。

その後、徳川家康が関東に拠点を置いたため、廃城となりました。現在国指定の史跡となっており、いつでも登って見ていただけます。

大給城跡からの夕日

大給城跡への道は、鉄壁の防御を誇っていただけあって、細く急な傾斜で足場が大変悪くなっていますので、実際に登られる際には、大給城の防御力や「ここに見張りがいたんだろうな」などと感じながら、足元に注意していただき、登ってください。

大給城跡物見岩

大給城跡アクセスマップ

「とよた歴史マイスター」大　募　集

とうとつですが、「とよた歴史マイスター」をご存知でしょうか。

YES（知っている）
↓
Q「とよた歴史マイスターである。」
↓　↓
YES　**NO**
A へ　B へ

NO（知らない）
↓
Q「豊田市の歴史や文化財について、何かひとつ紹介できますか？」
↓　↓
YES　**NO**
B へ　C へ

「とよた歴史マイスター」事業がはじまり、１年４カ月がたちます。

昨年度６月に第１期とよた歴史マイスターが誕生し、10月には第２期生、そして今年の６月に第３期生が加わり、総勢62名が参加しています。

「とよた歴史マイスター」の活動には、大きくわけて基本活動と自主活動があります。基本活動は、郷土資料館が行っている事業を一緒に行うものです。例えば、来館者に展示解説をしたり、小中学生の史跡見学の講師やその補助をしたり、昔の道具の体験や暮らしぶりを語ったり、資料館で開催する講座に関わる、などの活動があります。

自主活動では、マイスターが興味をもっている歴史や文化財を調べたり、グループで勉強会をしたり、各地で講師を行うなどの活動を展開しています。

さて、あなたは最初の問でABCのどれに行きあたりましたか。

Aへ行きあたった方、「とよた歴史マイスター」として活躍している皆さんですね。積極的な行動力がある方です。自分たちの住んでいる豊田市の歴史や文化財を知りたい、子どもたちに伝えたい、郷土史のファンを広げたい、考古学が好き、古文書が好き、博物館が好き、などなど豊田市の歴史を学び、伝え、楽しみたいという熱い想いをいだいています。引き続き、豊田の歴史ファンを増やす活動に協力し、自分自身の歴史好きのパワーで、多くの人と交流を広げてください。ラッキーアクションは、マイスター活動です。

Bへ行きあたった方。あなたは、「とよた歴史マイスター」に興味・関心を持ちつつも、そんな暇はないなぁ、活動まではなかなかできないなぁ、この活動に入ったら何か特典があるかなぁ、など思っていませんか。

とよた歴史マイスターの活動は様々です。強制する活動や参加回数などのノルマは一切ありません。基本活動や資料館で開催する研修会に参加したり、仲間を募って知識・教養を深める活動などを通して、豊田市の歴史ファンを広げていく活動です。

マイスターになったら、特典があります。郷土資料館特別展の招待券の贈呈があります。とよた歴史マイスターにご参加の方には、郷土資料館学芸員の解説による研修会を行っています。例えば、企画展・特別展のマイスター向け展示解説会、古文書入門講座、マイスターからの要望があれば、学芸員が個別の相談にものっています。ラッキーアイテムは「とよた歴史マイスター募集要項」です。

Cへ行きあたった方。豊田の歴史を１つも紹介できないなんて、本当にそうですか。歴史は、人びとの暮らしの変遷です。30年前、60年前、100年前の暮らしを覚えていますか。どんどん変化していますよね。ご家族、子どもたち、孫たち、ご友人と「むかしはね」「あの頃はね」とお話されたことはありませんか。自分たちがこの土地で暮らしてきた生活の変化を感じ、一緒に共有し、人に伝えたいなぁと思うことは自然なことではないでしょうか。歴史を伝えたい気持ちは、すでにあなたの心の中にあるはずです。あなたのラッキースポットは「豊田市郷土資料館」です。

B・Cの皆さん、まずは、郷土資料館または公共施設に設置、または、豊田市郷土資料館ホームページに掲載している「とよた歴史マイスター募集要項」を手にとってみて下さい。

（大平知香）

味噌樽～みそだる～

今回は、新しく収蔵品へ仲間入りをした、味噌樽について紹介します。「味噌樽」とは、名前の通り味噌を仕込み、保存することに使った樽です。資料を観察すると、高さ 52.8ｃｍ、口径 58ｃｍ程のいわゆる四斗樽と呼ばれる大きさであることが分かり、側面には「第貳（二）號　味噌樽」という文字が、底面には「昭和貳（二）十五年一月」という新調した年号を見ることができます。

実は、資料館には竹のタガで締められた昔ながらの「樽」がいくつか資料として収蔵されています。高さが 1ｍ13 ㎝、口径が 1ｍ23 ㎝もある大きなものから、写真の味噌樽の大きさ、さらに小さいサイズのものまで大きさも様々です。しかし、樽を使って作るものは味噌だけではなく、漬け物や醤油など、昔は自前で保存食・調味料などを作っていたため、一言に樽といっても、「味噌」を作った樽とは限りませんでした。そのため、この資料のように「味噌」と書かれた味噌専用であったことを示す資料は珍しいものです。

さて、この味噌樽を寄贈いただく際に、「委託味噌で使っていたものだと思う」とお聞きしました。

「委託」味噌って？？？

ということで、調べてみると、家で作った大豆と樽を味噌醸造会社に渡し、作ってもらう味噌のことを「委託」味噌と呼んだようです。このような方法で味噌作りを委託するようになったのは、昭和 20 年代後半から 30 年代前半頃のことで、豊田市内では、「桝塚味噌」で知られる野田味噌商店さんや越戸の丸加醸造所さんで行われていました。戦後すぐの頃は、味噌醸造会社から指導員が来て、近所数軒の共同で行う味噌作りの方法を教えてもらった地域もありました。

寄贈いただいた樽にも、「碧海郡上郷村桝塚　野田味噌店」の文字が印刷されたラベルが貼ってあるものもあり、味噌作りを委託する際に使っていた樽であることがうかがえます。

昭和 30 年代前半頃が委託味噌のピークだったようなので、味噌の味と共に覚えている方がいらっしゃるのではないでしょうか。

ちなみに、私たちがよく食べるおなじみの「赤味噌」ですが、大豆と塩のみで作られているもので、愛知県、岐阜県南西部、三重県北部や徳島県の一部に限られたものだそうです。味噌だけをみても、それぞれの地域に特色のある味があることが分かります。

昔はそれぞれの家の土間の仕切られた一角に、樽に仕込んだ味噌を置いておく「味噌部屋」があり、各々が作った味噌を家族で食べたものでした。この味噌樽は、味噌を手に入れる方法が、家で仕込む方法から、現在のように販売されているものを購入するようになるまでの過渡期を伝えてくれる、貴重な資料です。　（名和奈美）

参考文献：『新修豊田市史 16　別編　民俗Ⅱ　平地のくらし』

「第３回 とよた歴史検定」を開催します！

受検者募集中 !!

第３回「とよた歴史検定」を下記のとおり開催します。日頃から郷土の歴史に興味をもっている方はもちろん、この機会に学習してみたいという方や郷土の文化財などを知りたいという方など、多くの方の挑戦をお待ちしています。

1	日　　時	平成 28 年 12 月 3 日（土） 午前 10 時 30 分～ 11 時 30 分
2	会　　場	豊田市青少年センター（豊田産業文化センター４Ｆ） 豊田市小坂本町 1-25
3	受検資格	どなたでも受検できます。※同じ時間に実施するため、上級と初級は併願できません。
4	受 検 料	初級：500 円　　上級：1,000 円 （中学生以下無料） ※再チャレンジ割引　初級：400 円　上級：800 円（前回と同級を再受検の場合）
5	出題範囲	旧石器時代から現代までの豊田市の歴史・民俗・文化 ※新修豊田市史概要版『豊田市のあゆみ』から 80％程度出題
6	出題形式	初級　四択問題 49 問、記述問題　1 問 上級　四択問題 40 問、記述問題 10 問
7	参加記念品	初級　豊田市郷土資料館オリジナルクリアファイル 上級　豊田市郷土資料館オリジナルハンドタオル
8	合格者特典	初級　豊田市郷土資料館オリジナル手ぬぐい 上級　豊田市郷土資料館オリジナルペーパーウェイト
9	申込方法	平成 28 年 11 月 13 日（日）までに、チラシに印刷された「申込はがき」（豊田市郷土資料館ＨＰからもダウンロード可）を郵送（当日消印有効）、もしくは豊田市郷土資料館へ持参。※チラシは、交流館などにも置いてあります。

【昨年度の問題】

＜初級＞ **Q 1**　徳川家の始祖である松平家の菩提寺は次のうちどれか？

ア：隨應院　　イ：長興寺　　ウ：観音寺　　エ：高月院

Q 2　現在豊田市内で確認されている古墳の数は 260 基以上あるが、市内で一番多い古墳の形は、次のうちどれか？

ア：前方後円形　　イ：円形　　ウ：五角形　　エ：八角形

＜上級＞ **Q 3**　天和元年（1681）から寛延２年（1749）まで挙母藩を治めていた本多家は、幕府の要職も勤めていた。その役職は次のうちどれか？

ア：組頭　　イ：寺社奉行　　ウ：老中　　エ：知事

Q 4　足助の町並みにある旧鈴木家住宅は、古い部分は江戸時代に建てられ、文化財に指定されている。どのような種類の文化財か？

ア：市指定文化財　　イ：県指定文化財　　ウ：重要文化財　　エ：国宝

過去の問題と解答は、豊田市郷土資料館のホームページで公開しています。

解答　Q 1：エ　Q 2：イ　Q 3：イ　Q 4：ウ

■利用案内■

開館時間　9：00～17：00
休 館 日　毎週月曜日（祝祭日は開館）
入 館 料　無料（特別展開催中は有料）
交通案内　名鉄「梅坪駅」より南へ　徒歩 10 分
名鉄「豊田市駅」より北へ　徒歩 15 分
愛知環状線「新豊田駅」より　徒歩 15 分
とよたおいでんバス「陣中町一丁目」より西へ　徒歩５分
駐 車 場　約 20 台

●豊田市郷土資料館だより　No.96

平成 28 年 10 月 28 日発行
編集・発行　豊田市郷土資料館

〒471- 0079 豊田市陣中町１－21
TEL.0565-32-6561　FAX.0565-34-0095
E-mail● rekihaku@city.toyota.aichi.jp
URL● http://www.toyota-rekihaku.com

※豊田市郷土資料館だよりは、HP でもご覧いただけます。